様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 6 月 12 日現在

研究種目：若手研究（B）
研究期間：2006～2008
課題番号：１８７２０１１１

研究課題名（和文）日本語と韓国語の呼称選択に見られるポライトネス・ストラテジーに関する研究
研究課題名（英文）Studies on Politeness strategy in Selection of Address Terms in Japanese and Korean

研究代表者
林　ひょん情（LIM HYUNJUNG）
山口県立大学・国際文化学部・准教授
研究者番号：３０４１２２９０

研究成果の概要：日本語と韓国語の呼称表現がそれぞれの場面、相手、発話内容などに応じて、発話の中で戦略的意図を持って使用されていることに着眼し、ポライトネス・ストラテジーの観点から両言語の呼称の使い分けを対照・分析した研究である。その結果、「社会距離」と「力関係」の要因が発話場面の負担の度合いに関係なく、両言語の呼称選択の丁寧度に強く影響していることが分かった。また、両言語の呼称語によっては、述語表現の選択にかなり柔軟性を持つ表現があることが明らかになった。性差については、とりわけ聞き手が話し手より同等か目下の関係において影響が強いことが分かった。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００６年度	1,000,000	0	1,000,000
２００７年度	700,000	0	700,000
２００８年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総　計	2,600,000	270,000	2,870,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・言語学
キーワード：社会言語学、対照言語学

１．研究開始当初の背景

自称詞、対称詞、他称詞をあわせて呼称語という。呼称語は言語表現としては短いものの、日常生活における言語使用においては、それが使用される社会的人間関係を反映している。日本語と韓国語では、自分や相手、そして話題の人物に言及する場合、発話者と聞き手、話題の人物との社会的関係、性別、場面などの違いによって、人称代名詞、地位・役職名、職業・役割名、親族名称、個人名、敬称など、多彩なバリエーションのなかから呼称が選択される。また、これらの呼称のそれぞれには待遇度が異なる様々な表現形式が存在する。しかし、このような多彩なバリエーションをもつ両言語の呼称ではあるが、両国の習慣や社会通念・文化的背景などの違いにより、その使い分けにおいては類似点とともに相違点が見られる。

両言語の呼称類型の構造を丁寧さに重点をおいて分析してみると、日本語の場合は上下関係よりも親疎関係を、韓国語の場合は親疎関係よりも上下関係（特に年齢による）が

呼称類型の使い分けを左右する面が多い。年齢は、相手との関係では変わらないが、社会的役割や親疎関係は、場面や相手によって変わるものである。これと関連付けて考えると、韓国語の呼称体系は絶対的使い分けをより重視しているのに対し、日本語の呼称体系では、相対的な使い分けをより重視しているといえる。しかし、相対的な使い分けや絶対的な使い分けという大きな分類だけでは、両言語の呼称表現形式の使い分けの要因や基準を説明しきれない点も多い。

そこで、両言語の呼称の使い分けを解明するためには、基準からはみ出した現象も包括的に説明できる新しい概念を取り入れて検討する必要がある。言語行動、とりわけ使い分けの理解のプロセスを研究するうえで、ポライトネス・ストラテジーという概念は重要なキーワードであろう。特に、呼称表現は、表現形式そのものが対人関係修辞の機能を持っているため、ポライトネス・ストラテジーの概念を用いて、その使い分けの構造や使用パターンについて説明することが可能であると考えられる。

2．研究の目的

本研究は、日本語と韓国語の呼称表現がそれぞれの場面や相手や発話内容などに応じ、ある程度戦略的に使うことができるという点に注目し、ポライトネス・ストラテジーの観点から両言語の呼称の使い分けを検討することを目的とする。具体的には下記の通りである。

(1) 日本人と韓国人のウチ・ソト・ヨソ意識が呼称選択のポライトネス・ストラテジーにどう影響しているか。
(2) 場面や相手、また発話内容などに応じて選択される呼称表現形式のポライトネス・ストラテジーは日韓両言語の間でどう異なるか。
(3) ポライトネス・ストラテジーの男女差は日韓両言語でどう異なるかを検討する。

3．研究の方法

本研究では、日本と韓国在住の日本人と韓国人を対象に、両言語の呼称選択にみられるポライトネス・ストラテジーに関する質問調査を行った。主な調査内容は、(1)ポライトネス・ストラテジーの要因が言葉遣いの丁寧度判定に及ぼす影響、(2)呼称選択のポライトネス・ストラテジーと適切性判断、(3)性差がポライトネス・ストラテジーに及ぼす影響力の検証からなる。

①日本語と韓国語の丁寧度の判定に関わるポライトネス・ストラテジーの要因の検討

相手を配慮するポライトネス・ストラテジー選択の要因を示したモデルとして、Brown & Levinson (1987) のポライトネス普遍理論がある。本調査では、Brown & Levinson モデルに示されている、①「社会的距離」、②「力関係」、③「負担の度合い」に、「文化差」と「話し手と聞き手の性差」の要因を加えて、その影響を検討する。それぞれの検討の対象とする要因として、①「社会的距離」は「親(親しい)・疎(あまり親しくない)・外(初対面)」の３つ、②「力関係」は「目上１(大学の先生)・目上２(年上の先輩)・同等(同じ年の同級生)・目下(年下の後輩)」の４つ、③「負担の度合い」は「雑談と依頼」の２つ、④「文化差」は「日本・韓国」の２つ、⑤「話し手と聞き手の性差」は「同性・異性」の２つを設定した。分析では「雑談と依頼」の場面に分けるため、一つの場面につき、24 通りの条件になる。調査では被験者がこれらの条件に対して、どのくらい気を遣うかを、「全く気を遣わない」の１から「非常に気を遣う」の５までの５段階尺度で回答を求め、丁寧度を測定した。そして、データを検討し、日韓両言語の呼称使用の違いが予想される場面を選定した。

②呼称類型と述語表現の待遇度の共起関係および呼称選択のポライトネス・ストラテジーに関する適切性判断の測定と検討

呼称類型と述語表現の待遇度の共起関係に関する再検討を行った。調査では、異なる社会的関係を有する聞き手に対して話し手が第三者について言及する場合に、呼称と述語表現の待遇度に違いが見られるかどうかについて分析し、先行研究において指摘された呼称使用の流動性と規範性について再検討を行った。

また、呼称選択のポライトネス・ストラテジーに関する適切度を測定し、それを適切性判断の基準とした。日本語と韓国語の呼称選択のポライトネス・ストラテジーに関する適切判断は【表現自体はあるけれど、この相手に向かって（あるいはこの場面で）いうのは適切だ／不適切だ】という判断である。適切性判断は「とても適切である（＋２)」から「全く適切でない（－２)」の５段階とし、適切度がマイナスであれば否定的、プラスであれば肯定的であるという一般指標として使用する。

③性差がポライトネス・ストラテジーに及ぼす影響についての検討

既述の調査データをもとに、話し手の性差と聞き手の性差が両言語のポライトネス・ストラテジーにどのように影響するのかを検討した。

④分析方法

本研究では、言葉遣いの丁寧度に関わるポライトネス・ストラテジー要因や呼称選択の適切性判断に影響を及ぼす要因の階層性を検

討するため、SPSS 社の統計ソフト Classification Trees (SPSS, 2006)を使用した「決定木（decision tree)」分析を行った。「決定木」分析は一つの目的変数を複数の説明変数から予測するとともに、その結果を予測力の強い順に階層化して樹形図（dendrogram）の形で描き出す言語の共起頻度や要因の因果関係を調べるのに有効な解析法である。具体的には、本調査で設定した諸要因がどのような優先順位で、また複数要因がどのように混在してポライトネスの判断に影響しているかを検討した。

4．研究成果

日本語と韓国語の呼称選択に見られるポライトネス・ストラテジーに関する本研究の研究成果は下記のとおりである。

（1）ポライトネス・ストラテジーの観点から日韓両言語の言葉遣いの丁寧度を決める要因を階層的に分析した結果は図１と図２に示した通りである。①言葉遣い全体の丁寧度は、雑談の場面（M=3.41, SD=1.18）よりも依頼の場面（M=3.65, SD=1.17）のほうが高い。これは、ポライトネス理論からすると、相手のフェイスを脅かす度合い(FTA)は、雑談の場面より依頼の場面で高くなるからだと解釈できよう。

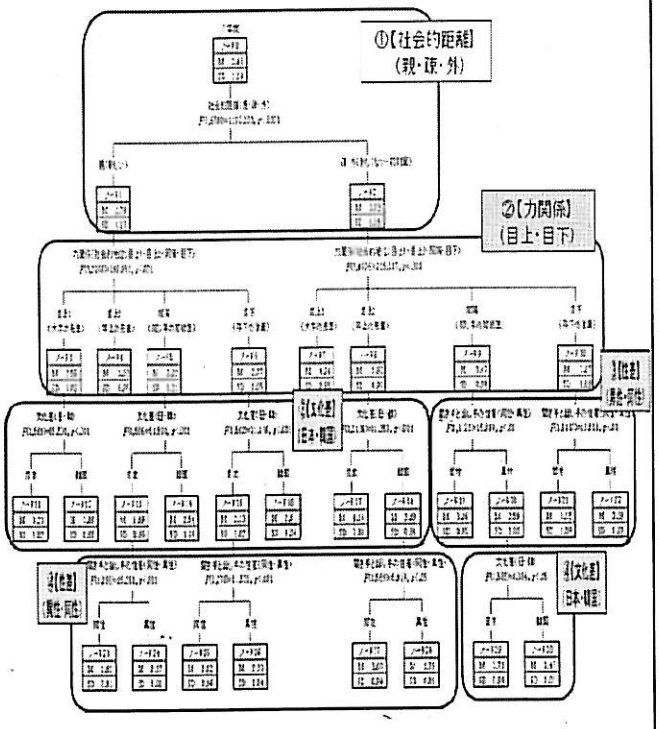

図１.「雑談場面」における丁寧度判定に関わるポライトネス・ストラテジー要因についての階層的分析

②雑談場面と依頼場面ともに「社会的距離」が４つの要因のなかで最も上位にきており、「親」と「疎・外」とで丁寧度が有意に異なっていた。「疎・外」が同じグループに分類されていたが、これは、親しくない相手と初対面の相手に対しては丁寧度に違いがなかったことを意味する。

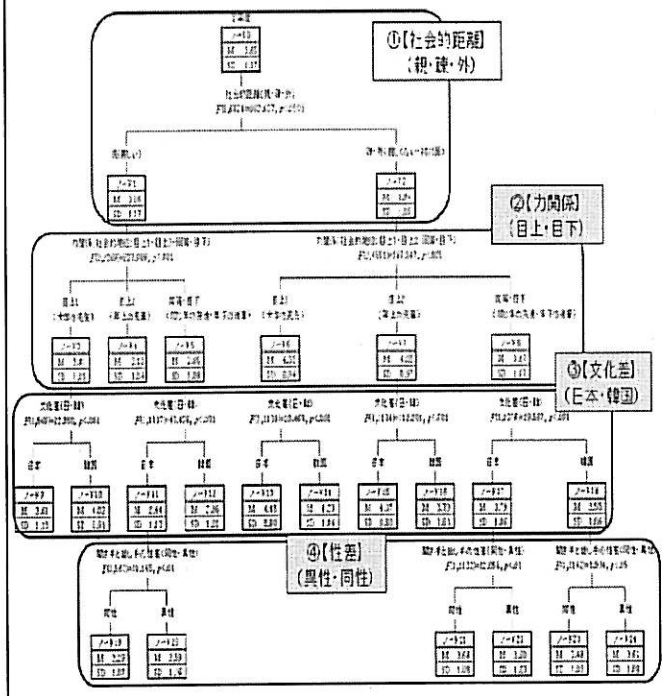

図２.「依頼場面」における丁寧度判定に関わるポライトネス・ストラテジー要因についての階層的分析

③社会的地位による「力関係」が両場面ともに２番目に強い要因となっていた。丁寧度のパターンは、雑談と依頼の場面で若干異なっていた。雑談の場面では「親」と「疎・外」のそれぞれについて「目上１（大学の先生)」「目上２（年上の先輩)」「同等（同じ年の同級生)」「目下（年下の後輩)」の４つに分かれているのに対し、依頼の場面では「親」と「疎・外」のそれぞれについて「目上１（大学の先生)」「目上２（年上の先輩)」「同等（同じ年の同級生）・目下（年下の後輩)」の３つに分かれた。つまり、依頼の場面では、同等の関係と年下の相手に対しては同じ丁寧度で接していることがうかがえる。

④依頼の場面では、「社会的距離」と「力関係」に続いて、日韓の「文化差」、「聞き手と話し手との性差」の順で下位要因として分類された。一方、雑談の場面では、「社会的距離」と「力関係」が上位にくることは同じであるが、「力関係」の下位要因は日韓の「文化差」と「相手の性差」が混在していた。しかし、両場面における丁寧度のポライトネ

ス・ストラテジーの要因を全体的にみると、「社会的距離」＞「力関係」＞「文化差」＞「聞き手と話し手の性差」の順でより強く影響しているようである。特に、「社会的距離」＞「力関係」の要因は、雑談場面か依頼場面かといった負担の度合いに関係なく強くかつ安定して影響していることが分かった。

⑤「日韓差」の丁寧度は、「新（親しい）」では、韓国が、「疎・外（親しくない・初対面）」の間柄では日本の丁寧度が高く、全体的に親しい間柄では韓国人が、親しくない・初対面の間柄では日本人がより気を遣いながら話をしていることが分かった。

⑥「話し手と聞き手との性差」の丁寧度は、全体的に同性よりも異性に対してより高くなることが分かった。

(2) 日本語と韓国語における呼称語と述語表現の使い分けには規範性が強く、日本語では相手との上下関係よりも親しいか親しくないかといった親疎関係、韓国語では相手との年齢の上下関係をより優先して、その場にふさわしい呼称類型と述語表現の待遇度を選択することが多い。しかし、聞き手による日本語と韓国語の第三者に対する待遇表現の使い分けを、他称詞と述語待遇の呼応関係の観点から検討してみた結果、日本語は相対的な使い分け、韓国語は絶対的な使い分けの傾向が強いものの、今まで言われてきた基準ではうまく説明がつかないケースを見出した。

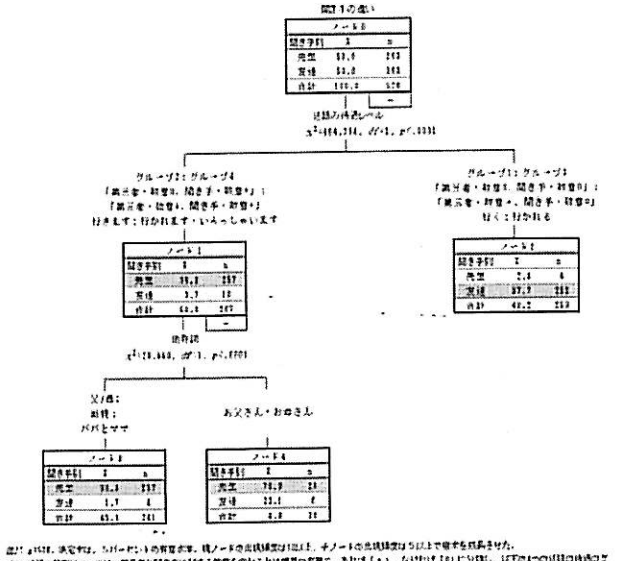

図3.「第三者が親の場合」における日本語呼称語と述語待遇に関する決定木

例えば、「友達に『自分の親』のことをいう」場面では、日本語では「お父さん・お母さん」（60.1%）が、韓国語では「appa・eomma」（66.2%）が最も多用される傾向が見られた。また、日本語の場合、「お父さん・お母さん」という「父・母」より高い待遇をもつ他称詞であっても、「行かれる」「行かれます」「いらっしゃいます」などといった述語待遇表現よりも「行く」「行きます」などといった述語待遇表現と共起して用いられるケースが圧倒的に多いことが分かった。このような、主体を表す他称詞は上げておきながら、述語では身内を上げない待遇表現を用いるケースは、主語と述語の待遇が必ずしも一致していない点で大変興味深い。

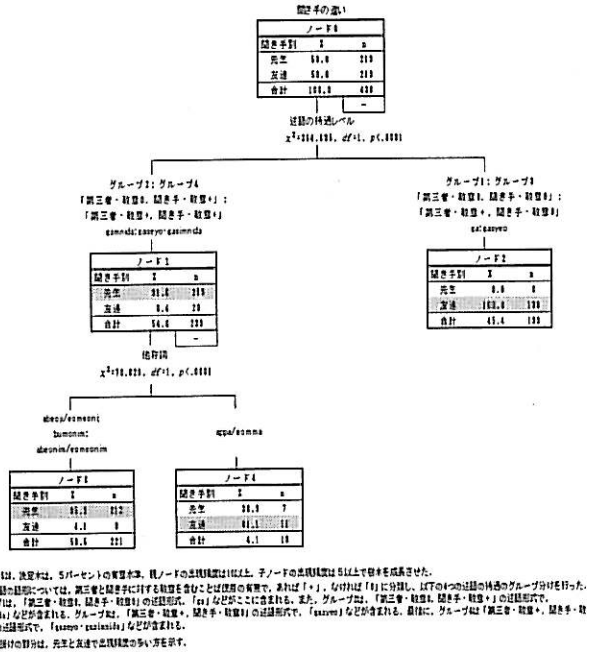

図4.「第三者が親の場合」における韓国語呼称語と述語待遇に関する決定木

韓国語における「appa・eomma」については、述語形式との呼応関係に有意な違いは見られていないことから、「お父さん・お母さん」に比べると述語表現の選択に柔軟さがうかがえる。相対的および絶対的な使い分けに関する基準から逸脱した表現については、両言語共に、とりわけ友達が聞き手の場合に起こりやすくなっている。つまり、比較的近い間柄では言語使用に関する規範意識が弱まりやすい点で、日本語と韓国語は類似しているといえる。また、本調査の決定木分析では、話し手の男女差の影響は、全ての場面で見られなかった。

本調査では、比較的に親しい間柄では規範性が弱くなり、従来の呼称語と述語表現の共起関係から逸脱した使用が見られることや呼

称語によっては述語表現の選択に柔軟性があることが示された。その背景には、まず、日本と韓国の両者において、社会の変化に伴う規範意識の変化があることが考えられる。しかし、こうした規範から逸脱した呼称語と述語表現の共起関係および独立性をもつ呼称語の使用には、話者の何らかの意図が働いていることも考えられる。これについては更なる検討が必要であろう。

(3) 場面や発話内容などに応じて選択される呼称表現のポライトネス・ストラテジーは日韓両言語の間でどう異なるかをアンケート調査に基づいて検討した。調査では、「呼称表現（親族名称・実名の２種類）」「会話場面（授業中・雑談の２種類）」「親疎関係（親しい・親しくないの２種類）」「聞き手との性差（異性・同性の２種類）」「話し手の性差（女性・男性の２種類）」の５つの説明変数で、日本人と韓国人大学生の先輩に対する呼称の適切性判断を予測する決定木分析を行った。

その結果、日本の大学生は、場面や相手によってその表現形式は少し異なるものの、先輩に対しては実名を用いるのが一般的で、親族名称を用いることは適切でないと判断する傾向が強かった。一方、韓国の場合は、上下関係や発話の内容に関係なく、全体的に先輩に対しては親族名称を用いるのが適切で、実名を用いるのは適切でないと判断していることが明らかになった。

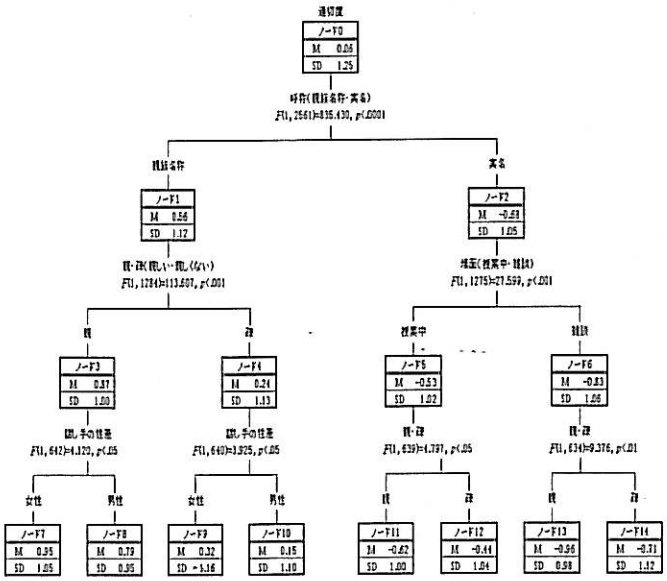

図４．韓国人大学生の先輩に対する「親族名称」と「実名」使用の適切性判断に関する決定木分析

韓国人の先輩に対する「親族名称」と「実名」の使用に関する適切性判断に及ぼす要因をより具体的にみると、「親族名称」には親疎関係が最も影響しており、その次に話し手の性差が影響している。また、「親族名称」の使用は、親しい間柄で、特に話し手が女性の場合が最も肯定的に判断されていることが分かった。一方「実名」の使用には、場面（授業中・雑談）の違いが最も強く影響し、その次に親疎関係が影響していることが分かった。

以上のことから、韓国人は、「親族名称」使用は相手との距離を縮めるための呼称として、「実名」はインフォーマルな場面よりはフォーマルな場面でより相手と距離をおくための呼称として用いられていることがうかがえる。

(4)性差（話し手の性差と聴き手の性差）がポライトネス・ストラテジーにどのように影響するのかを先行データをもとに検討した結果、とりわけ聞き手が話し手より同等か目下の関係において影響が強いことが分かった。

ポライトネス・ストラテジーを予測する要因は、同じ社会的規範を共有するなかであっても、個人の属性や心理的要因によって個人差がみられることが予想される。また、規範的使用から逸脱した呼称語と述語表現の共起関係および独立性をもつ呼称語の使用には、話者の何らかの意図が働いていることも考えられる。したがって、今後は言語使用の容認性判断とそれに及ぼす個人の属性や性格特性の影響をあわせて検討することで、話者のストラテジー的使用の配慮の面に対しても両言語の呼称使用を検討していきたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

①林炫情(2006)「代名詞的用法の対称詞使用に関する日韓対照研究」『人間環境学研究』5(1), 1-19.　査読無

②林炫情・玉岡賀津雄・宮岡弥生（2008）「日本語と韓国語の第三者待遇表現：聞き手の違いが他称詞と述語待遇選択に及ぼす影響」『国際文化学部紀要』14, 56-70. 査読無

③Tamaoka, K., Lim, H., Miyaoka, Y., & Kiyama, S. (in press) Effects of gender-identity and gender-congruence on levels of politeness among native Japanese speakers, *Journal of Language and Social Psychology*, 査読有

〔学会発表〕（計４件）
①林炫情・玉岡賀津雄・宮岡弥生，「肯定と否定表現の違いが行為要求型表現の丁寧度に及ぼす影響」，韓国日本学会第 74 回国際学術大会，建国大学校（韓国），2007 年 2 月
②林炫情「日韓両言語の肯定と否定表現の違いが行為要求型表現の丁寧度に及ぼす影響」，広島韓国研究会，広島大学，2007 年 7 月
③林炫情・玉岡賀津雄・宮岡弥生・金秀眞，「丁寧度の判定に関わるポライトネス・ストラテジーの要因についての階層的分析」，韓国日本文化学会第 29 回学術大会，塩国大学（韓国），2007 年 10 月
④Tamaoka, K., Lim, H., & Miyaoka, Y. Effects of gender-identity and gender-congruence on levels of response politeness, 日本語用論学会第 10 会大会（10 周年記念世界大会），関西大学，2007 年 12 月

６．研究組織
(1)研究代表者
林　ひょん情（LIM Hyunjung）
山口県立大学・国際文化学部・准教授
研究者番号：３０４１２２９０

(2)研究分担者

(3)連携研究者